

千人針データベースの作成に向けて

渡 邊 一 弘

I はじめに

以前、日本民具学会で「戦争の民具」ということばを提案した際、千人針は現在の民俗文化財の分類のどれにあたるのかについて質問されたことがある。これまでであれば「民間信仰」「俗信」などの枠組みで分析されることが多かったが、これを「戦争」という枠組みで捉えなおす必要があると回答した。「戦争の民俗」については、多くの研究が提示されてきたが、その中心は英霊や慰霊に就いての研究であり、民俗学が対象とすべき銃後の暮らしについての研究は民俗学の分野でも少ない。「戦争の民俗」という視点からも、歴史学の視点からも研究対象として取り上げられる機会の少ないモノに焦点を当てられるのは民具学の視点であろう。戦争関係の民俗的事象については、歴史学からも民俗学からも注目はされるが、戦争の一断面として捉えられているのみで、どちらの分野からも詳細な調査研究は行われることなく、現在に至っている。

「戦争の民具」とは、戦争にまつわる民俗的な習俗を反映している民具の総称として提案したものである。「戦争」という広いテーマの中でも、出征にまつわる道具や習俗が上げられよう。弾丸除けの御守り、千人針、日の丸の寄せ書き、奉公袋、提灯行列、出征の幟、慰問袋、陰膳など、出征に際しては、軍に関わるものとは別に、様々な物・習俗が必要とされた。藤井忠俊は、これらの出征にまつわる行事を「赤紙の祭り」と表現した⁽¹⁾。なかでも千人針は、日中戦争を経験した人のほとんどが千人針風景を目撃しており、その作製にたずさわり、あるいは出征する兵士のために準備し、多くの兵士が御守りとして戦地に持参した。千人針の記憶は、その立場と時代で様々であり、千人針の持つ意味も違ってははずで、その違いを丁寧に分けし、分析をする必要がある。また、こうした出征に関わる一連の行事の成立には、在郷軍人会や婦人会などが大きく関わっており、歴史学・民俗学・社会学など多面的な研究が望まれる。

戦後65年を過ぎた現在、戦争関連の証言を得るのも困難な時代となりつつあり、博物館に寄贈された実物の資料について詳しい説明が聞ける機会も少なくなっている。千人針などの戦争関連資料は、一部の間では、コレクターアイテムとなっており、千人針に関しては、ネット・オークションでも年間で150件以上も（平成21年8月～22年8月、YAHOO オークション、筆者調べ）出品されている。アメリカでも戦争関連資料のオークションは行われ、なかでも千人針は人気のアイテムの一つで、コレクター自身が日章旗と千人針の本を出版しているほどである⁽²⁾。

いったん所蔵者の手元を離れたり、所蔵者が亡くなったりすれば、その物の記憶は失われることになる。昭和館が所蔵している資料の中にも不明な物が少なからずあり、こうした資料は、編年的整理が難しいが、どのような千人針があったのか、その実態を理解することは、戦争というものを実態として捉える一歩であると考えられる。

「戦争の民具」という分野を開拓するに当たって、例えば千人針を例にして、全国的なデータ

千人針データベースの作成に向けて

ベースを作成し、事例を収集し、分析できないか。戦争の民具を分析する一つのたたきとして千人針の分析を提示してみたい。

II 研究史にかえて

千人針については、これまで「千人針研究に向けての整理」（『昭和のくらし研究』第6号、平成20年、昭和館）、「戦争の民具--千人結から千人針へ」（『民具研究』140、平成21年、日本民具学会）、「宮崎の千人針（一）」（『みやざき民俗』63、平成23年、宮崎県民俗学会）に研究をまとめてきた。その成果の一つとしては、千人針に関する文献資料を整理することで表1「千人針の流行」のようにその流行をおさえられたことであろう。

表1 千人針の流行

時 期	特 徴	説 明
I 北清事変以前	戦争の習俗として成立	様々な要因で千人結が成立
II 日露戦争以後	流行初期段階	千人結が都市部中心に流行。関西→東京へ
III 満州事変頃以降	全国展開期	全国的に都市部で流行。女学生の厄年、婦人会の成立、銃後という言葉の普及との関連。
IV 日中戦争頃以降	全国民への普及 バリエーション	メディア等により伝統として意味づけされる。 実際に作られる千人針のバリエーション
V 太平洋戦争頃以降	定着と衰退	スパイ防止のため街頭で禁止 千人針のジレンマ（特攻隊への千人針など）
VI 終戦以後	ステレオタイプ化	イメージが単純化され伝えられる。

本稿で扱う昭和館所蔵の千人針のほとんどは、IV期の日中戦争以降の物が中心であるが、この時期のブームはその直前のIII期のブームが元になっている。満州事変の頃に千人針がどのように理解されていたのか、前回の研究史で取り上げなかった昭和7年（1932）の江馬務の報告をここに取り上げる。⁽³⁾なお、本稿では、旧漢字・仮名遣いを、新字体・仮名遣いにあらためた。

千人針の淵源ともいえるべき、二枚三枚重ねた裂れを針で縫い腹に巻くことは、古くからあったもので戦国時代から桃山、江戸時代にかけて、戦争に行く時は必ず下に分厚い肌衣を着たり、鎧の間隙や膝小僧には殊に分厚い糸でさしこにしたものをつけたりしたものです。天文期には鉄砲が入り、貫通を防ぐために今まで皮であった鎧が鉄製の鎧となったが、不完全なので饅頭輪とか周輪とか、肩当、脇引などで捕ったり、そのほか膝頭には十王頭、草摺の部分には下散を用いたものですが、これらはみな裂れを厚く重ねたり綿を入れたりなどして、糸で亀甲形、或いは十の字形に縫ったのです。裂れの鎧にしても着込にしてもみな亀甲形か十字形かにさしこにしたもので、裂れが石や矢、弾丸の防止に非常な効力のあることは夙に先人が発見していたことです。平安朝や源平時代には背に垂れた母衣を頭にかぶって敵前に進んだもので、これを利用したのが布団で、布団のような分厚い裂れを小手などにも用いました、また綿入れの効果は奈良朝にはすでに発見され、綿甲が用いられました、これがいわゆる千人針として現われたのは日露戦争の時からで日清戦争の際はまだ現われていませんでした。

江馬は、風俗史研究の視点から武具とのつながりで千人針を説明しているが、実物の千人針は決して物理的に弾丸を遮るような丈夫な物ではないことから、必ずしも説得力有る説明ではない。しかし、満州事変頃の千人針の事例として、次のように様々なバリエーションを紹介している。

喜ばれる糸の色 糸で縫うについて女の手、女の力が現われて来たので、これも女の一心岩をも通すという意味からなんでしょう、そこで千人針の千人ですが千は昔から多数の代表語で、仏教では千日講、千日詣として用いられ、神道では御千度として使われたが、足利時代には千がいたく喜ばれ、千人斬り、千檀巻き、千枚貼りなど各方面に千が使われるようになり、徳川を経て今日に及び、千が多いことの代名詞みたいになっているわけです、多数の合力、千人合力にはどんな敵弾もかなわないだろうというのが千人針の千人の意味でしょう

千針は戦死に通ずる しかし千針は戦死に通ずるというので、近ごろ九百九十九、千一、千三針が用いられるようで、これは日本人の三とか九の奇数好みから来ているのでしょう、糸も四子糸は、四が死に通ずるので嫌われ、三子が神子に通ずるので喜ばれますが、これは徳川時代にはなかったことです、糸の色はただ今緑を用いているが、昔は緑のほか青などいろいろの色を用いました、近来勝色（藍）が縁起がよいので好まれます、糸を切るのは歯か手かいづれかがよいので、刀を忌むところから切れ物では切らぬことになっています、また五黄の寅は強いので、今年は十九歳の女に縫ってもらうのが一番よいといわれ、しかも月経のある時が精がついている意味から特によいといわれています。

以上のようなバリエーションをもった千人針習俗が、日中戦争の勃発に併せて再登場する際には、メディア等の影響もあり、ある程度の伝承の画一性と形態のバリエーションをもって全国に広がっていくことになる。

Ⅲ 千人針調査項目について

おおよそ次の項目が千人針を分析するうえで考えられるであろう。このほか文献調査によって明らかになる項目も出てくると思うが、とりあえず簡単な項目を挙げておく。

<聞き取りによる調査>

- 1、都道府県
- 2、作製年
- 3、作製者

<実物判断による調査>

- 1、形状

- ①腹巻型 ②胴巻型 ③手拭型 ④チョッキ ④帽子 ⑤ハンカチ ⑥その他（禪など）

- 2、布色

- ①白 ②黄 ③その他

- 3、布素材

- ①木綿 ②絹（人絹） ③その他

- 4、糸色、糸玉数

- ①赤 ②黄 ③緑 ④青 ⑤黒 ⑥その他

- 5、五銭玉・十銭玉

- ①無し ①5銭玉 ②10銭玉 ③5銭10銭玉

千人針データベースの作成に向けて

6、虎の絵・文字

①点描 ②手書き

7、サムハラ

8、御守・御朱印

9、布覆い（シラミ除け）

10、武運長久・日の丸

11、既製品

IV 聞き取りによる調査

以下、項目ごとにどのような視点で千人針を見ていけばよいのか、その視点について整理し、表2～5で昭和館所蔵の千人針について紹介することとする。

1、都道府県

はたして、千人針に地域性はあるのか。この点については、名称・形状、そして習俗の定着状況等が考えられよう。昭和館の事例からは地域的な特徴ははっきりとは認められなかったが、地域性については以下のような事例を参考にしていきたい。

表2 昭和館所蔵千人針の聞き取り内容

※「応召年」のSは昭和を示す。

資料番号	出身地	応召年	内 容
K40-00092	福岡	S11年5月	昭和11年5月に出征し、昭和13年頃帰国し、持ち帰った。再び出征して昭和20年6月10日沖縄にて戦死。
D09-00004	神奈川	S12年	昭和12年から昭和13年。結婚した時に実母が準備した千人針を渡された。
D43-00001	長崎	S12年	昭和12年～昭和20年。支那事変従軍中、故郷から送付され、河北省で入手した。
D29-00002	大阪	S12年	昭和12年～昭和20年2月。召集に備えて準備したもの。
K08-05747 K08-05748	東京	S12年8月	昭和12年(1937)8月に召集された際に贈られたもの。中心部分には、妻（縫）と三人の娘（順、貞、良）の記名がある。
D10-00001	千葉	S13年6月	昭和13年から昭和14年。夫が応召の際に妻が作ったもの。
K09-03110	神奈川	S13年7月	海軍少佐であった父に贈ったもの。父は、昭和12年12月から呉航空隊で勤務、その後13年7月に香久丸（特設水上機）飛行長に転勤が決まった。香久丸は中国への進出が決まっていたので、戦地へ赴く父に千人針を贈ろうと考えた。娘は呉の二河（にこう）尋常小学校に在学中、父の出征が決まり、まず千人針を同級生の家に持ち込み、家族に縫ってもらった。その後は家のお手伝いさんが市場に立って通り行く人に頼んだ。戦地に赴くまでに間に合わせたと思う。所持品の多くが基地に残されており、この千人針はトランクに入っていた。
D09-00002	神奈川	S14年	入営時に家族が近所を回って作った。
D11-00001	埼玉	S14年	昭和14年中支出征にあたり東京都銀座明治製菓銀座売店勤務の女店員から贈られた。
K08-00683	東京	S14年	親戚の女性が街角に立って千人の人たちから針を糸をとめてもらったもの。中国戦線（北支那）にて敵の弾丸に当たらないために腹に巻いた。
N35-00110	山口	S14年1月	武運長久を折り、真心のこもった一針一針を皆様方からいただきできたものを親が戦地へ送ってくれた。
K09-02451	東京	S14年	昭和14年徴兵された際、入営にあたり贈られたもの。内部に穴空き銭と御守りが縫い込まれている。
K09-02452	東京	S14年	昭和14年徴兵された際、入営にあたり贈られたもの。荻窪八幡宮の御朱印がある。
N04-00018	秋田	S15年頃	戦死して遺品として保管していた。
D08-00004	東京	S15年12月	昭和15年(1940)12月の現役入営にあたり贈られたもの。親戚が準備してくれたもので、成田山で護摩を焚いて御朱印を押してもらった。
D08-00002	東京	S16年	夫に召集令状が届いた際に妻が隣近所の方々をお願いして作成した。「祈武運長久」を書き記した文字枠に針を通してもらった。御守りを縫い込み、死線を越えるという意味から五銭と十銭をともに縫い付ける。木綿で作られているものには虫がつきやすく、戦地で風呂に入ることもできない人が木綿を身につけるといふ。

N18-00020	新潟	S16年	大阪の難波高島屋の前で、十二月も押し迫った寒い日、千人針を持って立ちました。「お願いします」と急ぎ足の人たちにお願ひしました。「武運長久を祈っていますよ」「私は五黄の寅年だから必ず征っても無事に還ってきますよ」「死線（四銭）をこえるように五銭を」などと縫いつけて下さった人もありました。千人の人たちのまごころを体につけて祖国の為に決然とさわやかな笑顔で日の丸の旗の中に消えてゆきました。大東亜戦争が始まった年でした。故人所属の一個中隊が光満から南方へ移動するに当たり、自宅（軍舎）に遺留して出発したもの。その後、間もなく、移動列車により福岡郊外を進行中、米軍の艦載機による襲撃により昭和20年8月8日に戦死した。
D12-00001	茨城	S16年頃	母親が作った。
K19-00004	富山	S16年4月	昭和16年(1941)4月に現役入営した際、肉親の女性が縫って贈ってくれたもの。19年2月頃からは千島列島での守備任務につき、終戦後24年までシベリアに抑留されたが、酷寒地において腹巻きとして手放すことができなかった。
K13-00043	静岡	S16年7月	昭和16年(1941)7月の入隊にあたり、妻に贈られたもの。召集令状が届いてから入隊まで1週間ほどの猶予があったので、その間に妻が街角に立って通りゆく人々に縫ってもらった。その後、新平さんは満州(現・中国東北部)牡丹江の部隊に送られ、そこからこの千人針が汗で汚れたため洗うよう送られてきたが、洗濯して煙草や他の物と返送したところ、南方へ向かった後とのことで返送されてきた。南方に行ってから一切音信不通となった。
N45-00077	宮崎	S16年7月	昭和16年(1941)7月の2回目の召集にあたり贈られたもの。中国で従軍し、18年に復員した際に持ち帰った。19年5月に3度目の召集の際に、家に残していったものを妻が保管していた。冨永さんはその後、20年6月にレイテ島で戦死した。
N11-00272	埼玉	S17年	妹が寅年生まれであったことから妹自身が多くの人にお願ひして縫ってもらったもの。
K08-01363	東京	S17年1月	昭和17年1月10日～21年2月6日。母と妹が千人の方に一针一针一人一人に結んでいたもの。生きて持って帰った。
D13-00001	静岡	S17年4月	昭和17年4月～昭和20年8月。本人の母が彼の出征(入隊)の折、昭和17年4月に東京の御婦人方に依頼して作成された。
D13-00002	静岡	S17年5月	昭和17年4月～昭和20年8月。本人の母が彼の出征(入隊)の折、昭和17年5月に東京の御婦人方に依頼して作成された。
D09-00001	神奈川	S17年	昭和17年、上海海軍特別陸戦隊に勤務していた頃、友人の妹(当時女学生)から受け取ったもの。
K42-00009	大分	S17年4月	昭和17年(1942)に西部六十二部隊へ入営の際に従姉から贈られたもの。
K08-01800	東京	S17年4月	昭和17年(1942)4月に召集令状が来た際に、姉が叔母と一緒に縫ったもの。姉は寅年生れであった。この千人針は糸玉を表に出さず、和でぬぐいで覆ってある。サムハラ(サムハラ)の文字は叔父が書いてくれた。弾除けのお守りとして戦地へ持って行った。翌年1月には内地を離れ、南方を転戦しビルマで終戦を迎えたが、その間常に腹巻として巻きつけ、シラミもわいたが、洗濯して身につけていた。
K10-00561	千葉	S17年5月	昭和17年(1942)5月、海軍横須賀第二海兵団に入団した際に贈られたもの。兄嫁が千葉県野田の高等女学校に頼みに行き作ったものという。記名の墨文字は自分で書いた。寅年の人は年の数だけ糸玉を作ることができる。縫い付ける硬貨は五銭と十銭。「死線を越える」「苦戦を越える」という意味の他に合計十五銭であることから「銃後の護り」とも言った。岡田さんは志願兵として整備兵の基礎教育を受けた後、翌18年6月から台湾、フィリピン、シンガポールなど各地を転戦し、終戦は高等科整備術練習生として内地での工場実習中に迎えた。戦闘や航海など、ここぞという時だけ腹に巻き普段身につけることはなく、他の被服と一緒にしまっておいた。その当時は死ぬということを深刻には考えていなかったが、台湾の航空隊にいた時には米軍機の機銃掃射を受け、命からがら掩体壕に逃げ込んだこともあったという。
N04-00030		S18年	兄の妻が作ってあげた。
K30-00068 K30-00069	兵庫	S18年10月	昭和18年10月佐賀県で召集、20年8月14日、フィリピン・サンタマリヤにて戦死。千人針のチョッキ・腹巻を身につけて出征したもので、一人一人の心のこもった御守りであった。
K08-08249 K08-08250	東京	S18年12月	予科練入隊にあたって贈られた千人針。当時は18歳であったので、どうせ死ぬのだから弾除けの千人針はいらないと言って、入隊の際には断って持参しなかった。三重海軍航空隊奈良分遣隊に入隊し訓練を受けている際に父母が面会に来て千人針を渡されたが、腹に巻いたりすることはなくかばんの中に入れていたという。乗る飛行機がなく、訓練もできぬまま諫早練習航空隊で終戦を迎えた。
K09-01986	東京	S18年12月	立教大学予科在学中、昭和18年(1943)12月の学徒出陣にあたり贈られたもの。入営に先立つ10月21日、神宮外苑で行われた学徒出陣壮行会にも出陣学徒として参加した。入営後も朝鮮へ移駐したが、19年5月に特別操縦見習士官を命ぜられ、内地で飛行訓練を受けた。再び朝鮮と内地を移動し、各務ヶ原で終戦を迎えた。母が中心となって国防婦人会や隣人・知人・親戚などが製作を手伝ってくれた。
D08-00001	東京	S18年7月	昭和18年7月22日～21年6月。18年4月入営の前日までに妹と義姉が皆さんに頼んで仕上げてくれたので、入営の時から持っていた。軍隊で支給されたネルの腹巻きと一緒にほとんど毎日巻いていた。某氏が腹部に敵弾を受け、足も弾にやられ、背負って下がる時に足も弾にやられ私が背負って下がる時に某氏の血が付いた跡が千人針の右ヒモに黒ずんで残っている。
K08-00126 K08-00127	東京	S18年頃	昭和18年頃、出征にあたって贈られた。

千人針データベースの作成に向けて

K08-07048	東京	S18年	入営の際、寅年の知り合いの女性から贈られたもの。入営後、満洲（現・中国東北部）を経てニコバル島へ転戦したが、戦闘の時などは半分にして腹巻き替わりにして着用した。南方に行ってからシラミがたかるといふのと、暑いのでふだんはほとんど腹に巻くことはなく、背のうちに入れてばなしではあった。半分にして腹巻き替わりにしたが、戦闘の時などは着用したが、戦闘の時などは着用した。転戦の際もずっと持ち歩き、昭和21年（1946）6月に引揚げた際に持ち帰った。
K09-02340	神奈川	S18年	昭和18年(1943)11月29日、召集の際に贈られたもの。2人の妹が街頭に出て、町行く人に頼んで作ってくれた。集まってくれた多くの人に見送られ、新大久保駅から電車に乗って入営先の千葉県我孫子の東部八三部隊に入隊した。
D19-00001	富山	S18年	出征の際に贈られたもの。昭和17年(1942)から富山県中ノ口国民学校訓導(くんどう 現在の小学校教諭)を勤めていたが、18年末に陸軍に召集された。千人針は担任をしていた6年生の女児児童が入隊までの短い時間に、近隣の婦人や在校中の女子をお願いして縫ってもらい、作って持ってきてくれた。「担任していた6年生の女子が入隊までの短い時間に校下の婦人や在校中の女子をお願いして作って持って来ました。無事に帰れる戦況ではありませんでしたから、また持参していても生きては帰れない戦況の悪化でしたからお守りにはならないとは思いましたが、担任した教え子とともにお国の為に、またこの子らの幸せのために働きたいと念じて大切に身につけていました。満州で汗がにじんでいます。予備士官学校に入学し、卒業後一度だけ学校を訪ねて子ども心に心よりお礼をいい任地に行きました。特攻、本土決戦で戦場も内地も一緒の時代となりましたが、この千人針は私に多くの女の人の誠心と教え子の願がこもっているようで、この千人針と一緒に死のうと決心し、子どもらを守れたらとも祈りました。」この千人針には「先生ノ武運長久ヲお祈りシマス」「贈 中ノ口六年生女子一同」と記されている。
K08-10089	東京	S18年10月	中学校の同級生二名の名前が記入してある。入隊にあたり千人針、日の丸の寄せ書き、鉢巻きを贈られたが、どのようにしてうけとったか覚えていない。
R39-00102	高知	S19年	昭和19年、佐世保海兵団に着任。その際に作ってもらったもの。赤い丸の印は小さな竹を切り、朱肉を付けて捺した。赤い糸ばかりで作ることは物資不足のためできなかった。御守りは、母親が付けたものらしい。
K09-00238		S19年1月	昭和19年1月現役兵として入営、昭和20年2月から山東省泰安付近まで警備につき、以後終戦により復員するまで身につけていた。
K08-04628	東京	S19年	昭和19年夏、出征の際に贈られた。
K08-07226	東京	S20年	昭和20年に、巢鴨に住む祖母が弟用と一緒にとげぬき地蔵様に行って作ったもの。相馬さんもいつか出征する日が来るかも知れないと早めに作られた。
K08-06725	東京	S20年4月	母が持ち回りで親戚、知人に頼んで結んでもらったもの。入営のため郷里へ帰ってから贈られた。
K08-01309	東京		使用者はシベリヤ抑留で昭和24年に帰還したが、この千人針は疎開させておいた荷物の中に入っていた。
K45-00001			「母親が婦人会長だったので、出征兵士の方を駅で見送りました。ほとんど毎日でしたので、常に用意していたようです。」
R19-00133			日中戦争に参加した祖父が持ち帰ったもの。一字ずつ「力」の字を書いてもらった。

名称については、高崎正秀の報告⁽⁴⁾によれば、千人針という名称に集約されてくる以前は様々に呼ばれたことが分かる。例えば、「東北地方では千縫い・千人縫い、新潟では千人縫い・千人針、静岡から尾張・美濃にかけては千結び、伊勢の松坂では千人結び（以上昭和六年上海事変の頃の調査）。四国徳島・関西・中国では千人縫い。広島呉市では千人針・千人瘤・千本針・千勝針。」とある。こうした名称については、現在となっては聞き取りも難しく、昭和館での収集の際にはほとんどが千人針として報告を受けている。一部資料番号 D8-00011には「千人祈念帯」と明記しており、N13-00004は「千玉結」と聞き取りしている。

布や色についての地域性については、江馬務が、糸の色の地域性について、「糸の色が大阪は赤く、神戸は黄、京は青が多いといふこと⁽⁵⁾」と記している。昭和館所蔵の千人針についても、糸の色については、赤・白・黄・青・緑などとバリエーションに飛んでおり、兵庫は緑か黄色という点は江馬の指摘に通じるところがある。ちなみに兵庫県の姫路市立平和資料館の所蔵の千人針は、17点中半数以上が白・黄色などの赤色以外の糸が使用されている（口絵1を参照）。

沖縄では、日中戦争以降に役場をとおして婦人会に千人針作成の依頼があった事例などがあることから、あまり一般的ではなかったようである。一部、オナリ神信仰と集合した事例が報告されているが、一般的な事例であったのか、今後検証する必要があるだろう。また、当時の外地における千人針の事例も多く、今後千人針の習俗がどのように植民地へ伝えられたのかの分析も可能で

あろう。

2、作製年

千人針の実物として残されている最も古い千人針は遊就館所蔵の日露戦争の頃の千人結で、生成の木綿の布に太い黒糸が結ばれている。(詳細は「V 千人針所蔵の博物館資料館等」及び口絵12・13を参照)

満州事変の頃には、地域的にバリエーションのあった千人針は、日中戦争の時代にはある程度画一化され、全国に一気に広がったようである。現在、千人針の現物を確認できるのは、ほとんどが日中戦争以降の千人針であり、満州事変以前の千人針については聞き取りを頼りにするしか方法はない。寄贈者の一人、藤川はまさん(千葉県流山市在住)は次のように満州事変時期の経験を書いている。

昭和6年(1931)9月、満州事変勃発当時旧制四日市高女4年生だった私達はクラスの身内の方が兵役につかれる度に教室に千人針が持ち込まれ、その都度授業を中断しては作りました。晒に朱肉で押された千個の小さい丸い輪、その中心を赤い糸ですくい、一つずつ結び目をつくっては次々と手渡しこしらえ上げたものでございました。

その頃の状況からは戦争の恐ろしさなど実感として有りませんでしたけれど、これをお腹に巻いて行けば弾丸にあたらないと云う昔からの云い伝えを信じ、こんなことで何かのお役に立てるならと一針一針に心をこめたものでございます。

校門前で千人針をして居ります同封のナップはその頃の地方新聞に掲載されたものでございます。先日古いアルバムの中より見付かり見覚えのある顔やらその時代の風俗やらを大変なつかしく思い出しました。

7年後の昭和13年5月支那事変で主人応召あの頃とは全く違った感情で道行く人に千人針をお願いしたあの日のことが改めて甦り尚一層思い深くしたことでございました。



【写真1】満州事変の千人針風景(藤川はま蔵)

千人針の作製は出征に際して行われるのが一般的だが、召集に備えて事前に作ったり、召集に間に合わず、後で戦地に送る場合もあった。

昭和12~13年は、街頭での千人針作製が盛んであったが、16年以降は、スパイ防止のために街頭ではあまり行われなくなったといわれている⁽⁶⁾。昭和館所蔵の資料にも、伊保村長から「左記ノ通り姫路連隊区司令部ヨリ通達有之候条厳守相成度候」として「四、千人針ハ繁華街、百貨店、停車場、劇場、等ヲ避ケ成可学校・工場等ニ於テナスコト」「昭和16年12月20日以降実施」という通達がある。

しかし、実際には、地域差にもよると考えられるが、昭和館の事例としては、「昭和18年11月29日、召集の際に贈られたもの。2人の妹が街頭に出て、町行く人に頼んで作ってくれた。集まっ

千人針データベースの作成に向けて

てくれた多くの人に見送られ、新大久保駅から電車に乗って入営先の千葉県我孫子の東部八三部隊に入隊した。」(K09-02340)とあり、昭和18年頃までは街頭で千人針を集めていたことが分かる。また収蔵資料を見ても表3のように昭和20年まで千人針を作っており、また宮崎県の宮崎神宮の日誌では、昭和20年7月まで千人針祓をした記録が残っている⁽⁷⁾。街頭での千人針が制限されたり、物資が不足したなかでも千人針作製は終戦間際まで続けられた。

表3 日中戦争以降の昭和館所蔵の千人針の件数

年	昭和11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
数	1	11	4	9	3	7	10	13	4	2

3、作製者

千人針を作るに際しては、まず母親や妻等のような発起人がおり、街頭に立って通りすがりの見ず知らずの女性たちに声をかけるのが一般的であったようだが、発起人については、母・妻・兄弟姉妹、近親者、近隣、婦人会、女学生、会社同僚などが考えられよう。そして、どこで作製したかについては、街頭（駅前、寺社仏閣の参拝者、女学校の校門）、女学校内などがあげられ、作製者は、前述の発起人と同様に考えられよう。さらに、妻・母が夫・息子のために送るような特定される人物に向けた祈願用として作製したもの、女学校・婦人会が特定される個人のために作製した物と、匿名性の高い慰問袋用として大量に作製した物に分けられる。

V 実物資料による調査

聞き取りによる調査が最も重要であるが、戦争の体験者が少なくなる現在、実物が保管されているだけでも分かる事実があり、多数の千人針の分析から分かる事実も増えてくると考えられる。その分析の方向性を項目ごとに記しておく。

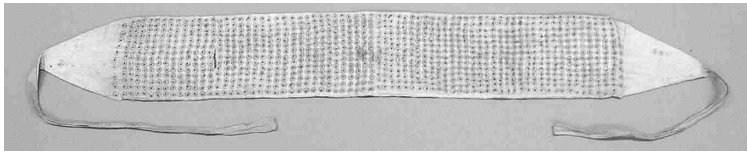
昭和館が所蔵している千人針103点のうち、75点について「表4 昭和館所蔵の千人針の分類表」に分類した。また「表6 千人針関連年表」として千人針関連の「五黄の寅」「寅年」「厄年」などの年齢表と戦争等の関連項目を記しておいたので参照していただきたい。

1、形状

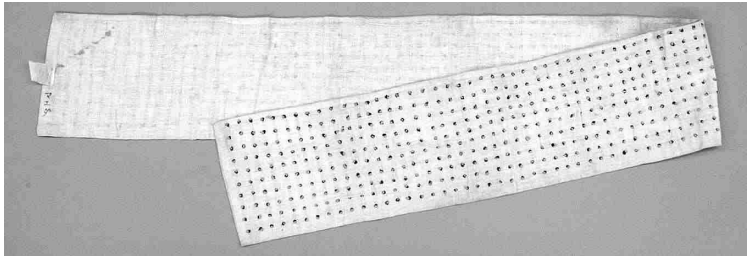
基本的には、軍隊の活動に無駄で邪魔な物は持ち込めないはずなので、常識的に持ち込んでもかまわないものに、千人針を縫い込んだものと考えられよう。種類としては、便宜上、次の種類に分けておくこととする。

- ①腹巻型（防寒具を兼ねたもので、ヒモが付いた物とする）——写真2
- ②胴巻型（比較的長尺の物で、コルセット兼物入れ、ヒモ無し）—写真3
- ③手拭型（基本的に手拭の大きさに、ヒモを付けていない物）——写真4
- ④チョッキ（防寒具のチョッキに糸を縫い込んだ物）——写真5
- ⑤帽子（戦闘帽などに糸を縫い込んだ物）——写真6
- ⑥ハンカチ（正方形のハンカチ代の大きさに糸を縫い込んだ物）—写真7

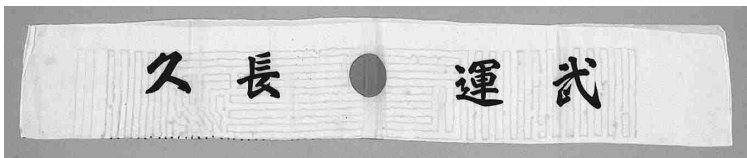
⑦その他（実際には褌・鉢巻など様々な形の千人針が存在する）



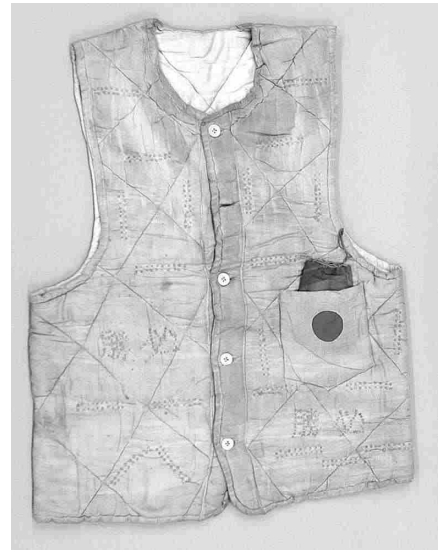
【写真2】腹巻型 (K10-00009)



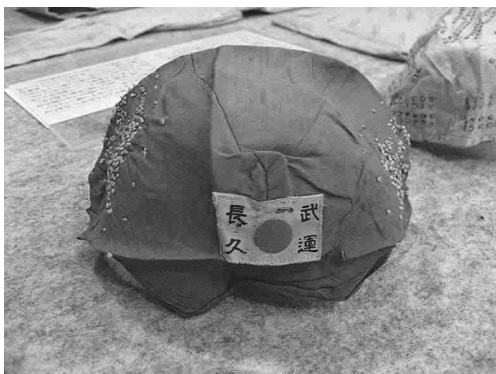
【写真3】胸巻型 (N30-00181)



【写真4】手拭型 (K45-00001)



【写真5】チョッキ (N30-00029)



【写真6】帽子 (姫路市平和資料館蔵)



【写真7】ハンカチ (D09-00001)

その他、昭和12年(1937)7月23日付『宮崎新聞(夕刊)』に、「宮崎女子高等技芸学校では非常時局に対する国民の熱意に刺激されて毎週の月曜日を節約デーと定め、お小使いを貯めた金で全校生徒三百八十名が白木綿を買い、可憐な愛国の情を傾けた千人針入りの褌三百八十枚を作成して北支、北満の第一線将士へ送ることとなった」とあるように、千人針入りの褌が作られたことが注目される。

昭和館所蔵の千人針の中では、腹巻型が圧倒的に多く、その次に手拭型が多い。帽子型を昭和館は所蔵していないが、姫路市平和資料館では所蔵している千人針17点中6点が帽子型であり、地域的には多く普及したものとも考えられよう。

表4 昭和館所蔵の千人針の分類表

※「応召年月」のS0000は昭和00年00月を示す。

資料番号	出身地	応召年月	寸法：縦×横、ヒモ左・右 (cm)	形状	布色	糸色	玉数
K08-00008	東京	S0600	16×88、両端切れ	腹巻	白綿	赤(黒印)	1000
K10-02130	千葉	S0700	33×86	手拭	白綿	赤	?
K40-00092	福岡	S1105	24×88、67×67	腹巻	白綿	赤	?
D09-00004	神奈川	S1200	15×136、24・58	腹巻	外白絹	赤(朱印)	?
D43-00001	長崎	S1200	15×91、43・43	腹巻	白綿	赤	?
D29-00002	大阪	S1200	16×45、74・74	腹巻	白絹	橙(赤印)	?
K09-00595	東京	S1200	24×126	手拭	白綿	赤(朱印)	?
K09-00594	東京	S1200	31×118	手拭	黄綿	赤(朱印)	?
N27-00053	和歌山	S1200	33×160	手拭	白綿	赤(黒印)	?
K08-05748	東京	S1208	14×125、57・56	腹巻	白綿、外白・綿	赤	?
K08-04749	東京	S1208	17×100	手拭	白綿	白(朱印)	1000
K08-05747	東京	S1208	17×94、63・63	腹巻	白綿	赤(朱印)	1000
R19-00073	富山	S1209	17×137、29・29	腹巻	白綿、外白絹	?	?
R19-00074	富山	S1209	18×113、28・28	腹巻	白綿、外白絹	?	?
K12-00155	東京	S1300	14×110	腹巻	白絹	赤	?
D10-00001	千葉	S1306	12×140、55・52	腹巻	白綿、外絹	赤(朱印)	?
K09-03110	神奈川	S1307	16×103	手拭	白綿	赤(朱印)	?
K29-00001	大阪	S1312	14×84	手拭	白綿	赤	?
D09-00002	神奈川	S1400	13×107、36・35	腹巻	白綿	青	?
D11-00001	埼玉	S1400	14×110	手拭	白絹	赤	?
N44-00008	熊本	S1400	15×127、37×37	腹巻	白綿	赤	?
K08-00683	東京	S1400	15×85、25・66	腹巻	白絹	白	?
K41-00003	佐賀	S1400	15×97、20×4本	腹巻	白綿	赤	997?
K09-02451	東京	S1400	16×112、33・34	腹巻	黄綿、外白綿	赤	?
N30-00181	兵庫	S1400	16×150	胴巻	白綿	黄(黒印)	1010
K09-02452	東京	S1400	17×112、72・72	腹巻	黄綿、外白綿	赤	?
N35-00110	山口	S1401	36×115、	手拭	白絹	橙	1000
N04-00018	秋田	S1500	16×110、140・140	腹巻	白綿	赤	?
K10-02131	千葉	S1509	14×124	手拭	白綿	赤	?
D08-00004	東京	S1512	16×103	手拭	白綿	赤	?
K08-07070	東京	S1600	12×83	手拭	白綿	赤	?
D12-00001	茨城	S1600	17×117、66・64	腹巻	黄綿、外白綿・絹	赤	?
D08-00002	東京	S1600	17×122、42・43	腹巻	白綿、外絹	赤	?
N18-00020	新潟	S1600	20×98、18×2本・28×2本	腹巻	白絹(綿入)	赤	999?
K19-00004	富山	S1604	17×89	腹巻	黄綿、中白綿	?	?
N45-00077	宮崎	S1607	14×103	手拭	白綿	赤(青印)	?
K13-00043	静岡	S1607	16×85、70・67	腹巻	白綿、中黄絹	赤	?
N11-00272	埼玉	S1700	13×110	腹巻	白綿	赤	?
D09-00001	神奈川	S1700	31×31	ハンカチ	白絹	赤	?
K08-01363	東京	S1701	14×105、42・20	腹巻	白綿、外白絹	白	?
K08-01800	東京	S1704	14×103、55・55	腹巻	外白(青)綿	?	?
D13-00001	静岡	S1704	16×114、56・56	腹巻	白絹	黄	?
D13-00002	静岡	S1704	16×148、70・70	腹巻	白綿、白絹	緑	1000
K42-00009	大分	S1704	8×121、37	腹巻	白綿	赤	?
K09-02069	神奈川	S1705	14×74、63・63	腹巻	白絹	?	?
K10-00561	千葉	S1705	16×90、18×4本	腹巻	白絹	赤	?
K08-00127	東京	S1800	14×113	手拭	白綿	黄	?
D19-00001	富山	S1800	15×128、	手拭	白綿	橙	1000
K08-07048	東京	S1800	17×107	手拭	白綿	赤(朱印)	983
N04-00030	秋田	S1800	22×100、57・56	腹巻	白絹、中白綿	赤	?
K08-00126	東京	S1800	98×18	手拭	黄綿	黄(赤)	?
D08-00001	東京	S1807	17×101、44・49	腹巻	黄絹	赤	?
K08-10089	東京	S1810	118×34	手拭	白絹	赤	1000
K30-00068	兵庫	S1810	51×44	チョッキ	白綿	緑	1000
K08-08250	東京	S1812	11×80、50・48	腹巻	外白綿	赤	?
K09-01986	東京	S1812	15×112、ヒモ取れ	腹巻	白綿	赤	?
K08-08249	東京	S1812	15×90、58・58	腹巻	外白綿	赤	?
R39-00102	高知	S1900	14×107	腹巻	白綿	赤・青・黄・緑	1000
K08-04628	東京	S1900	15×105、64・74	腹巻	白絹、外白絹	赤	?
K08-10197	東京	S1900	15×74、50・50	腹巻	外黄綿	赤	?
K09-00238	神奈川	S1901	14×97、20×8本	腹巻	白綿	赤	?
K08-07226	東京	S2000	15×122	手拭	白綿	赤(赤印)	?
D08-00006	東京	?	10×100	手拭	白綿(厚手)	白(青印)	?
K10-00009	千葉	?	14×112、40・40	腹巻	白綿	赤(朱印)	1000
N13-00214	静岡	?	15×102、40・40	腹巻	白綿・絹	白	?
K10-00008	千葉	?	15×118、57・57	腹巻	外白絹	赤(朱印)	?
K08-01309	東京	?	15×127、49・49	腹巻	白綿	黄(青印)	?
K08-00565	東京	?	15×203	胴巻	白綿	赤(青印)	?
N13-00004	静岡	?	16×100、77・75	腹巻	白綿	?	?
D08-00011	東京	?	16×128、67・68	腹巻	白綿	赤	?
N05-00038	宮城	?	17×131	手拭	白綿	赤	?
R39-00081	高知	?	17×147、46×47	腹巻	白綿	赤・青・緑	1000
K45-00001	宮崎	?	18×111	手拭	白絹	赤	1001
N30-00029	兵庫	?	47×60	チョッキ	白絹(綿入)	黄	?
K08-00566	東京	?	9×260(ヒモ込)	胴巻	黄綿、外白絹	青	?

五銭	十銭	虎の絵	サムハラ	御守	朱印	布覆い	武運長久他	日章・旭日旗	既製品
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1	1	—	—	—	—	—	至誠奉公(点描)	—	—
—	—	—	—	有	—	—	—	—	○
1	1	—	—	—	有	有	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	武運長久(点描)	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	○
5	0	—	文字	—	—	有	—	—	—
1	0	—	—	—	—	—	—	—	—
56	37	—	文字	—	有	—	祈武運長久	—	—
—	—	—	—	—	—	有	祈武運長久	赤丸	—
—	—	—	文字	—	—	有	—	赤丸	—
—	—	—	—	有	—	—	—	—	—
—	—	—	—	有	—	有	—	—	—
—	—	—	—	—	有	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	武運長久	—	—
—	—	—	—	—	—	有	忠勇	赤丸	○
—	—	点描	—	—	—	—	—	—	○
—	—	—	—	—	—	有	—	—	—
—	—	—	—	—	—	有	祈武運長久(点描)	—	—
1	1	—	—	—	—	—	武運長久(点描)	—	—
—	—	点描	—	有	—	有	祈武運	—	○
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1	0	点描	—	—	有	有	武運長久	—	○
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	日の丸	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
?	—	点描	—	—	有	—	武運長久	—	○
1	0	—	—	—	—	—	—	日の丸・旭日旗	—
—	—	点描	—	—	—	—	武運長久	—	○
2	2	—	—	有	有	有	祈武運長久	—	—
1	1	—	—	有	—	—	武運長久	日の丸	—
—	—	—	—	—	—	有	—	赤丸	—
—	—	—	—	—	—	—	武運長久	日の丸(点描)	—
1	1	—	—	袋有	—	有	—	—	—
—	—	—	—	—	—	有	—	—	—
1	1	—	—	—	—	—	祈武運長久(点描)	—	—
1	1	—	文字	—	—	—	武運長久	旭日(点描)	—
—	—	—	文字	—	—	—	—	—	—
—	—	点描	—	—	—	—	武運長久	—	○
—	—	—	—	有	—	有	—	—	—
—	—	—	文字	有	有	—	祈武運長久	—	—
—	—	—	—	—	—	有	—	—	—
1	1	点描	—	—	—	—	祈武運長久	—	—
—	—	寅の字	—	—	—	—	—	—	○
—	—	—	—	—	—	—	武運長久	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13	13	—	—	袋有	—	有	—	—	—
1	1	点描	—	—	—	—	武運長久	—	○
1	1	点描	—	—	—	—	武運長久	—	○
2	2	手書	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	有	—	必勝	赤丸	—
—	—	—	—	袋有	有	有	武運長久(手書き)	—	—
1	1	点描	—	—	有	—	—	—	—
1	1	—	—	—	—	有	武運長久(点描)	—	—
2	2	朱印	文字	別添	有	—	—	—	—
0	1	点描	—	—	—	有	—	—	○
—	—	手書	—	—	—	有	武運長久	—	—
1	2	—	—	有	—	有	武運長久(点描)	—	—
2	1	手書	—	—	—	—	—	—	—
2	2	—	—	—	—	有	—	—	—
—	—	—	—	有	—	有	—	—	—
—	—	—	—	—	有	有	祈武運長久	—	—
—	—	—	—	—	—	有	—	—	—
—	—	—	文字	—	—	—	武運長久	赤丸	○
—	—	—	—	—	—	有	武運長久	赤丸	○
1	0	点描	—	別袋	—	—	—	—	?
—	—	—	—	—	—	有	武運長久(朱書)	—	—
1	0	—	—	—	—	—	祈奮闘(点描)	—	—
—	—	—	文字	有	有	—	「祈武運長久」	—	—
—	—	—	—	—	—	—	武運長久	赤丸	○
—	—	—	お守り袋	有	—	—	必勝	日の丸	—
1	1	—	—	—	—	有	—	—	—

千人針データベースの作成に向けて

2、布色

色については、白い布が一番多く、次に黄色い布となる（口絵2・3を参照）。チョッキや帽子などには緑などの派手な色も使用されている（口絵4・5を参照）。黄色い布は日露戦争の時から使用されているが、なぜ黄色い布を使うかについては、毘沙門天の虎の色説と五黄の寅の説がある。

3、布素材

材質としては、木綿が一番多く、シラミ除けの為に絹、あるいは人絹の布で覆うことが行われている。なかには全部絹でできた物や、スフなどでも作られたという。ニガキ・センブリ・カチンなどで煮出した事例もあるが、見かけ上、実物資料からは判断が難しい。昭和12年8月30日付の『読売新聞』には、その方法について次のように紹介されている。

ニガキ（苦木）、センブリ、クララの根、ジャクブ（百部）の根。この何れかの一つを普通の薬局か漢薬専門店で見つけ、その五〇グラム（薬店で秤って貰う）を水一リットル（約五合五勺）に入れ珓瑯びきの金盃かなんかで十分間位火にかけ、さめきらぬ中に晒木綿でカスをしぼり取ります。こうして得た煎汁に千人針を一と晩浸して陰干しにすれば、戦地においても蚤や虱の巣窟となることはありません。

資料番号 N04-00018は、昭和15年頃に出征の幟のような物を再利用したものと思われる。物資不足の中こうした工夫をしながら千人針を作成したのであろう。戦時下では、木綿や糸も統制品となっているためその入手に苦労した話はよく聞かれる。

4、糸色、糸玉数

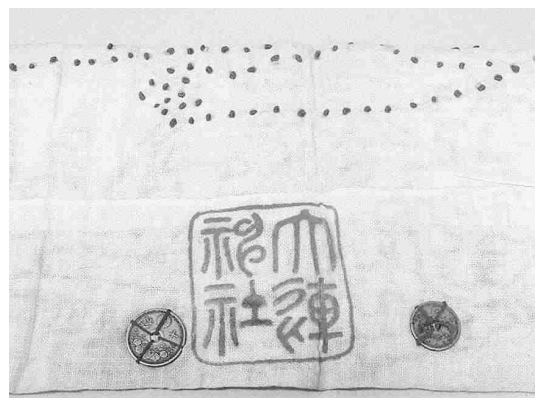
糸色は赤が多いが、前述の江馬務の紹介する糸色の地域性の通りではないが、昭和館所蔵の千人針では、赤の他、白・青・黄・緑などの色の糸が使われている（口絵6・7・8を参照）。高知県で昭和19年に作製されたという資料番号 R39-00102の、赤・青・黄・緑という複数の色の糸を使用している例については、「赤い糸ばかりで作ることは物資不足のためできなかった。」との証言がある（口絵11を参照）。

糸玉数について、1,000個の糸結びがあるのかを一部確認したが、必ずしも1,000個の糸結びがあるわけではないようである。わずかな数のずれは、数えにくさもあるだろうが、作った際に込められた特別な意味があるのかもしれない。

5、五銭玉・十銭玉

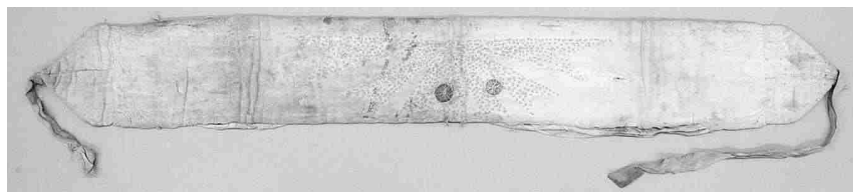
日中戦争以後、千人針の特徴としてあげられる、五銭を縫いつける事例は、昭和7年(1932)4月に寺田寅彦が記した「五銭白銅を縫付け『しせんを越える』というおまじないにする人もあるという話」という記述が現在のところ最も古いことになる。「死線を越えて」の死線と四銭とをかけた言葉であるが、この前提として、「死線を越える」という言葉が普及している必要がある。大正9年

【写真8】五銭・十銭を結び付けた千人針



① (K08-1363)

(1920) 1月号から雑誌『改造』で、賀川豊彦による小説「死線を越えて」が連載され、その後、単行本として出版され、大ベストセラー



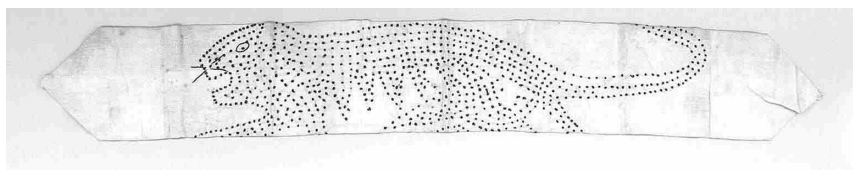
② (K09-01986)

となっており、この言葉はすでに定着していたと考えられる。さらに五銭と十銭合わせて十五銭＝銃後となり、「銃後の護り」を意味すると説明されるようになるが、これも前提として「銃後」ということばが定着している必要があるが、「銃後」ということばは、満州事変前後に使われはじめたことばであり、五銭と十銭を結び付けるといふ習俗は満州事変以降に流行した習俗と考えられる。こうした硬貨は、物理的な弾除けにもなるということ、その数は次第に増え、資料番号 K08-05747では、一つの千人針に五銭が56個、十銭が37個と多数付けられることとなる（口絵11を参照）。

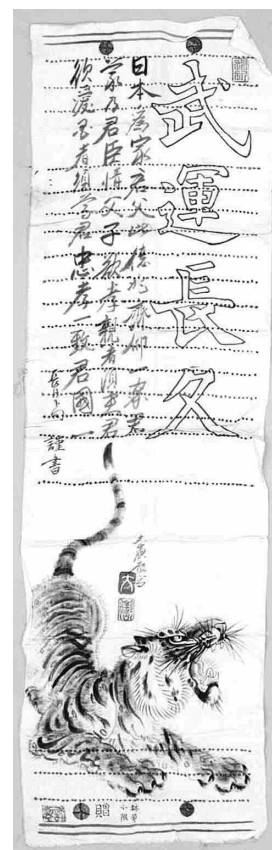
6、虎の絵・文字

何故虎の絵が描かれたのかについては「虎は千里行って千里戻ってくるから」と一般的に説明されている。本来は寅年、あるいは五黄の寅の女性がなせ年の数だけ縫ってよいのかなどという説明が為されたはずで、虎の絵についての説明がされるようになったのは、虎の絵が描かれるようになってからなのではないか。昭和館所蔵の資料からは、虎の絵が描かれるようになるのは、昭和14年以降であり、虎の絵を描いた既製品の登場と時期が重なっているのではないか。

【写真9】虎の絵



① (K09-01986)



② (K08-10089)

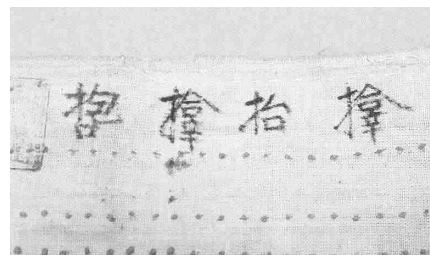
7、サムハラ

この符字の歴史は古く、加藤清正が朝鮮出兵の際に刀にこの文字を刻んだという説に始まり、江戸時代様々な文献で紹介されている。これが明治以降の戦争に際して怪我除け、弾丸除けの御守りとして流行した。この御守りの普及の背景には、万年筆メーカー、デパート、仁丹などの広告が背景にある。⁽⁸⁾

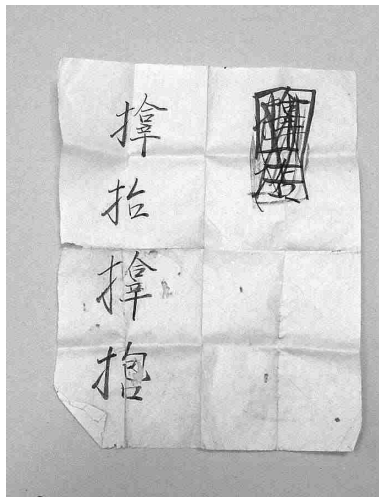
【写真10】千人針に記されたサムハラ文字



① (K08-01309)



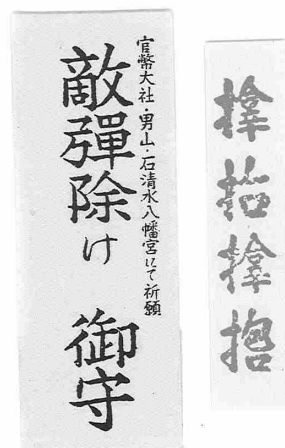
② (K42-00009)



③ (N30-00029)



④ (K08-05748)

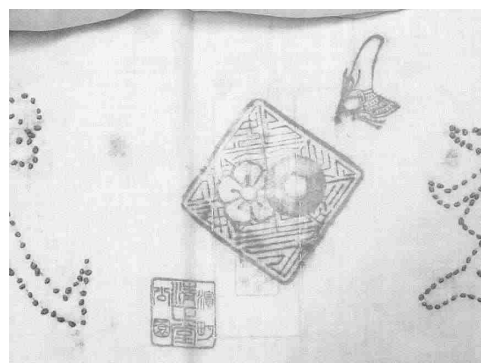


【写真11】石清水八幡神社のサムハラの御符 仁丹の広告として配られた

8、御守・御朱印

戦時中、出征する兵士の家族は、氏神社、著名な戦勝祈願の神社仏閣に祈願し、戦勝祈願の護符をいただいたり、千人針の祓いをしてもらったりして、千人針にその神社・寺院の御朱印をおしてもらった。成田山新勝寺の木札は、全国的によく見られる御守りである。千人針全体の数からすると、神仏の祈願や祓いを受けたものは少ないことが分かる。このことは千人針の目的が、神仏による祈願よりも千人の女性による祈願であることを示している。

神社仏閣による御守りの他、K41-00003・D13-00002・N13-00004のように植物の種や木の实などを入れる事例が見られるが、詳細は不明である。ナタ豆を千人針に入れたという話を宮崎で聞いたが、植物の再生力にあやかる意味のようである。あるいは勝栗など名称にあやかるなど、同様の伝承が付与された様々な種や実を千人針に縫いつけたものであろう。



【写真12】清正堂（東京都浜町）の御朱印。「清正公勝守」が中に縫い込まれている。(D08-00002)

表5 千人針の御守・御朱印

資料番号	都道府県	御守	朱印	備 考
K40-00092	福岡	有	—	綿入。御守袋有り
K08-05747	東京	—	有	「居神大神」「トラトラトラ」等
K12-00155	東京	有	—	中央部分にお守りが縫い込まれている。
D10-00001	千葉	有	—	和紙に版木で刷られた物が束で入っている
K09-03110	神奈川	—	有	「千人がまことをこめし針のあと みいくさします君をまもらむ」
K41-00003	佐賀	有	—	木の実？が縫い込まれている
N35-00110	山口	—	—	墨書「祈願上野八幡宮」
K09-02452	東京	—	有	「荻窪八幡神社」
D08-00004	東京	—	有	成田山で護摩を焚いて御朱印を押してもらった
D08-00002	東京	有	—	御守「清正公勝守」他、御朱印「浜町清正堂」
N18-00020	新潟	有	—	夫の名の裏に妻の名
D13-00002	静岡	有	—	御守5個「豆のような物」「熱田皇大神宮」木札御守他
R39-00102	高知	別添	有	墨書「祈願 此乃千人縫仁皇神乃神靈神依里鎮世シ申須」「祈武運長久」「サムハラ」「七生尽忠報国」「今日よりはかへりみなくて大君のしこのみたてといでたつ我は」御朱印「白山神社守護」「八幡宮守護」他（口絵11を参照）
K10-00009	千葉	有	—	御朱印
N13-00004	静岡	別袋	—	同梱されていた御守袋にヒメクルミ？が入っていた。破れ有り
N13-00214	静岡	—	有	墨書「南無妙法蓮華経」「身延山」「千葉山」
R39-00081	高知	有	有	「祈願 此千人縫乃守神依里鎮里坐世止申須」「祈武運長久」「今日よりはかへりみなくて大君のしこのみたてといでたつ我は」「サムハラ」「七生尽忠報国」「必誓滅敵」「祈健康」

9、布覆い（シラミ除け）

多くの千人針が糸玉を隠すように布で覆われている。これは糸玉にシラミがわくということで行われていたことのようなのである。昭和12年8月23日付の『読売新聞』には次のようにある。

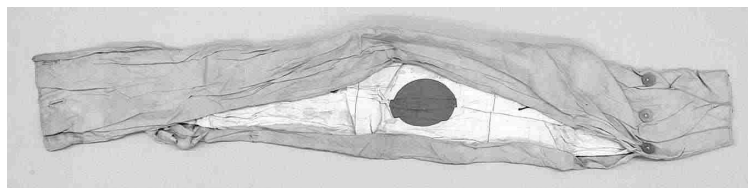
「銃後の皆さんへお願い！」「千人針の腹巻にもう一と工風を」「実はあの糸の結び目が「虱」の巣窟になるのです」「今度の日支事変が、いかに全国民の関心を惹いているかと云うことは千人針を作る女性の姿が日一日と街頭に増加してゆく事実を見ても判ります。ところでこの千人針の作り方をみますと、以前と違って糸を長く垂らさずに、一つ一つ堅く縫い結んで余分の糸を残さぬようにしています。これは誰云うともなく嘗て千人針を腹へ巻き付けて満州、上海で活躍した勇士達の経験談が伝わった結果です。第一線にある将士達は、汗に濡れ、泥にまみれて想像も出来ぬ苦勞を幾日も重ねるのですからいつか殆ど例外なしに虱に悩まされるのです、支那の兵隊は、虱を自分の身体の一部としてポリポリ好んで食べるそうですが日本人にはそんな真似は出来ません。工合の悪いことには折角心をこめて送った千人針の長い糸や結び目が、この憎むべき虱の巣窟となるのです。敵を怖れぬ勇士達もこれにはいささか弱りました。そこで千人針が改良を加えられて、現在のように糸を垂れぬようになって来たわけです。・・・が、皆さんに将士を護り、励ます熱意があるならば、ここでもう一と工風して貰いたいのです。晒の千人針が出来上がったならば、更にこれを人絹のようなサラリとした布で包むのです。

こうすれば虱の巣窟ともならず、また赤い糸の色が流れるのを防ぐことも出来るわけです。

千人針データベースの作成に向けて

慰問袋からこんなにも心を用いた千人針が出た時の勇士達の喜びようを、どうぞ想像してみてください。」

日露戦争や満州事変の際には、寒冷地で想定していなかったシラミの心配も戦地が移動することで深刻な問題となったのであろう。

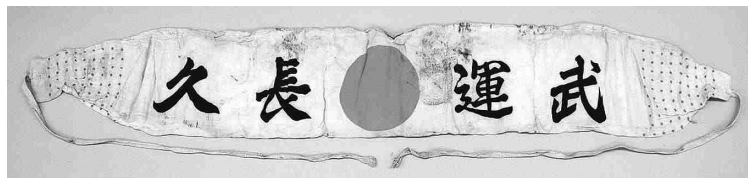


【写真13】布覆い (K19-00004)

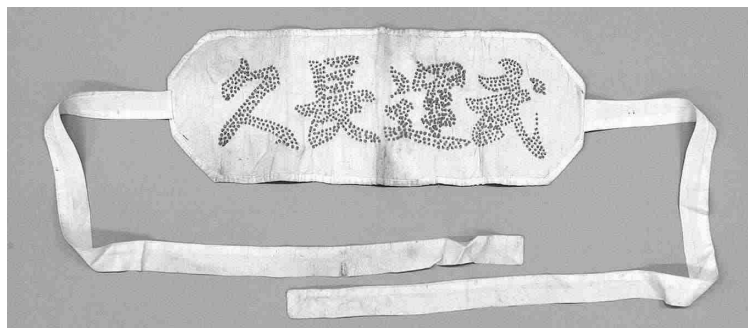
10、武運長久・日の丸

千人針に武運長久やその他のという言葉、あるいは日の丸が記される意味については、日の丸の寄せ書きの影響と考えられるが、千人針が個人の安全を祈るだけでなく、国の武運長久も祈っているのだということを示す意味もあると考えられる。千人針を単体で考えるのではなく、日の丸の寄せ書きとともに考える上で、重要な点であると考えられる。武運長久のことばの他、「大和魂」「七生報国」「忠勇」「米英撃滅」「至誠奉公」「必勝」「祈奮闘」「七生尽忠報国」「必誓滅敵」「祈健康」などが記されている。

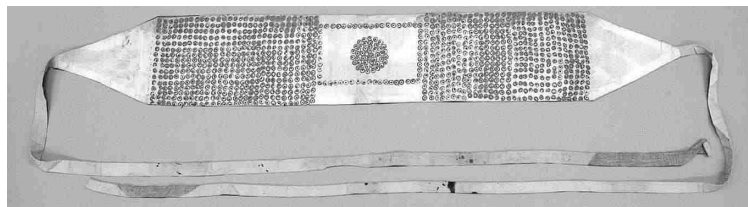
【写真14】武運長久・日の丸



① (D08-00028)



② (D29-00002)



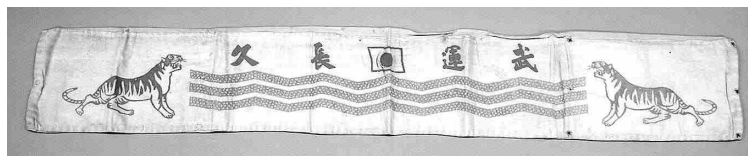
③ (N04-00018)

11、既製品

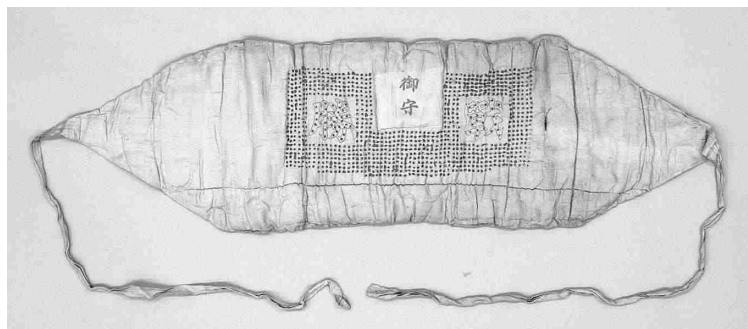
母や妻が手作りする千人針から大量に作るための既製品が売り出される。デパート、呉服屋、旗屋などで販売され、大量に作製する慰問用として婦人会・女学校で利用されたようである。

出征する兵士の増大を見込んで千人針の大量生産を見越した商業的な動きが見てとれる。詳しくは次頁の「1、既製品の千人針」で述べる。

【写真15】既製品



① (D08-00030)



② (K40-00092)

VI 千人針関連資料

ここまで実際に使用された千人針について詳細に見てきたが、千人針という流行を幅広く理解するうえで、下記のようなその周辺の資料を活用する必要があるだろう。また、これらの資料の他、映画、音楽、小説、舞台、落語、講談、俳句、漫画など様々な分野で、メディアなどを通して千人針が宣伝され、数ヶ月の内に全国に古くからの習俗として定着していった。

1、既製品の千人針

昭和12年(1937)9月1日付の『読売新聞』の「千人針腹巻」広告には、「シラミのワカヌ葉入り、サムハラ御符付(弾丸除)」「呉服・洋品・化粧品・薬店に有り、新案特許、定価五十銭、護国商会」という宣伝文句で紹介されているが、実物は確認できていない。

昭和館所蔵の中にも多く見られ、一般的にも最も典型的な物は、虎の絵を点描で描いたもので、写真16に紹介した千人針は、三越百貨店で販売されたものである。

また写真17は、「従軍記念千人針入カバー」として販売されていたものである。実用新案願「第二九九七五号」、意匠登録願「第八〇四三号」と記されている。説明文には次のようにある。

「これは妙案だ」

日本武士の風流にふさわしき猛虎画入りの千人針及お守を書信私物を入れて腹に巻いて下さい。温かくて虱、南京虫の侵入産卵を防ぎ凱旋の上は此を表装し永久に汗と脂血潮をそのままに従軍戦捷の記録を残し、額、又は掛軸として、お贈りになった方の名前と共に子々孫々まで家宝となるべき品で御座います。

写真16③のような既製品の千人針は写真17②のようなカバーを組み合わせるようにして利用さ

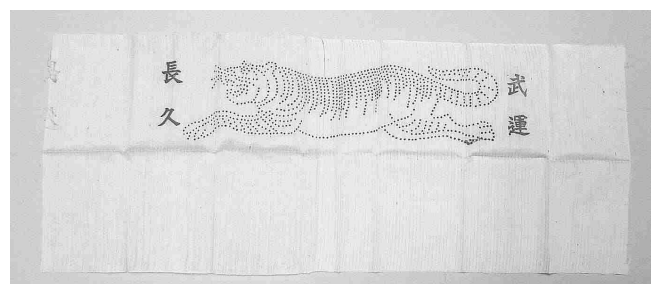
【写真16】既製品の千人針1 (筆者蔵)



① 販売状態



② 公定価格

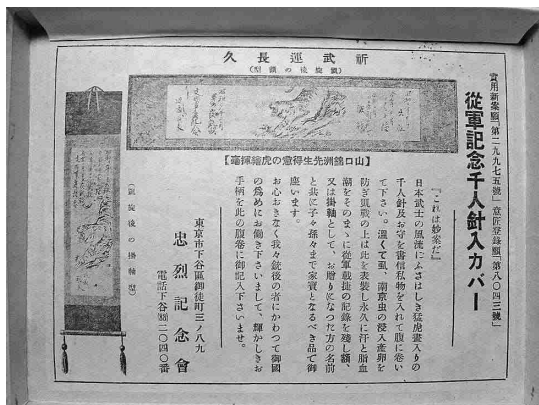


③ 製品

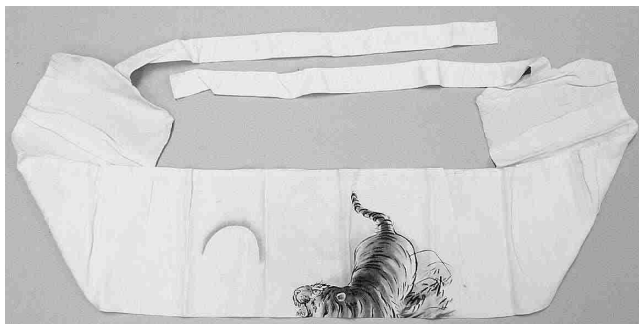
千人針データベースの作成に向けて

れていたようである。また写真18は、京都で販売されていた戦闘帽型千人針であるが、千個分の印は付されていない。口絵9も戦闘帽型千人針であるが、こちらは千針分印がつけてある。

【写真17】既製品の千人針2（筆者蔵）



① 箱裏書き



② 製品

【写真18】既製品の千人針3（筆者蔵）



① 戦闘帽型千人針・製品

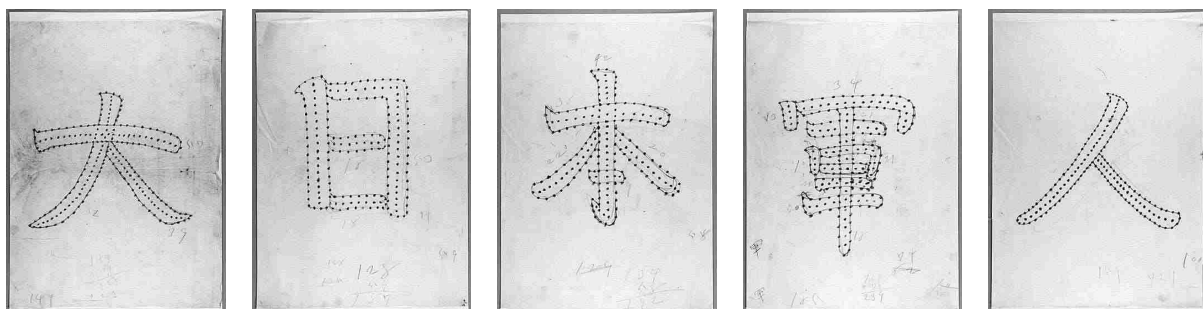


② 公定価格

2、千人針作製用台紙

昭和館所蔵資料に千人針作製の台紙がある。「大日本軍人」という文字を点で描いた型紙に記し、五文字の印を足すと千文字になるように描かれている。こうした台紙があれば複数の千人針が作りやすかったのだろう。

【写真19】千人針台紙（K34-00115）



3、絵はがき

千人針風景が描かれた慰問用の絵はがきが多数作成されている。写真20①の絵はがきについては、昭和12年8月19日付の『京都日日新聞』に掲載され慰問用として作成されたことが分かる。

【写真20】絵はがき（筆者蔵）



①



③



松田寅重画 千人針
品出令燈展柳袋街都文画一第

② 松田寅重画。第1回文部省美術展覧会出品



④ 中原淳一画。サトウ・ハチロー作詞の音楽はSPレコードで発売されている。



⑤ 岡山市就実高等女子学校・岡山実科女子学校

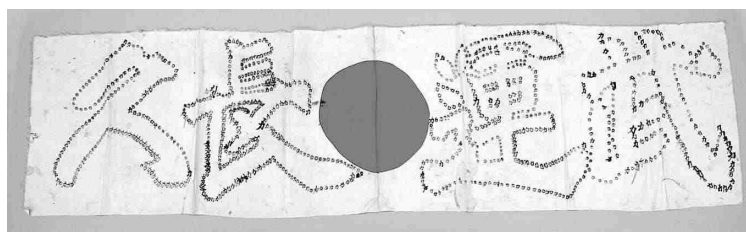
千人針データベースの作成に向けて

「戦線へ贈る美しい絵葉書」「陸軍省では北満、北支に派遣されている皇軍勇士を慰めるため今度恤兵絵葉書を作成、一人分絵葉書三種九枚、封緘葉書一種二枚、実用葉書十五枚のものを十六日現地へ向け発送した」

4、戦争の民具

弾丸除けの御守り、日章旗の寄せ書き、奉公袋、提灯行列、出征の幟、慰問袋など、出征にまつわる資料は、千人針を含め、互いに影響し合いながら成立してきたものである。例えば、「在郷軍人会等による男の日の丸寄せ書き／婦人会等の女性が用意する千人針」のように、戦時中の男女の役割としてとらえることも

可能であろう。その中間的な資料として、昭和館所蔵の千人力という資料がある。写真21のように、女性の千人針に対して、男性でも「力」という字を書くことで参加



【写真21】千人力 (R19-00133)

できるものとして生まれてきたも

のようである。「10、武運長久・日の丸」の項で述べたように、あくまでも個人的な弾丸除けの御守りであった千人針に戦争の大儀としての「武運長久」という言葉が示され、さらに国威を発揚するような日の丸の寄せ書きに書かれる言葉が千人針にも記されるようになった。

また当然のことであるが、御守りだけを縫い込んだチョッキなど、千人針を介さない神仏祈願のかたちがある。個人的あるいは共同体的な神仏祈願と千人針の違いは、不特定多数の女性の介在である。千人針のその背後には、用意してくれた母や妻の姿だけでなく、多くの女性の目により、「男らしさ」をふるいたたせる側面もあると考えられよう。⁽⁹⁾

VII 千人針所蔵の博物館・資料館等

全国的に千人針を多く収蔵している博物館・資料館は多数あると思われるが、現在確認した博物館・資料館について紹介しておきたい。今後、こうした博物館・資料館との連携などが図られると全国的な千人針のデータベースも可能であろう。

1、読谷村立歴史民俗資料館

服飾研究家で、『千人針』（昭和60年、情報センター出版局）の著者である森南海子所蔵の本土で収集した千人針約50点が寄託されている資料館であり、平成10年11月7日～12月27日にかけて特別企画展『『千人針』とお守りの世界』を開催している。このパンフレットには、様々な分類が試みられており、「千人針の刺し方」として、①玉結び、②並縫い、③X字型、④返し縫い、⑤並縫いと玉結び（複合型）、⑥並縫いとX字型（複合型）、⑦斜め縫い、⑧一針結び、⑨その他という、服飾研究家らしい分類を紹介している。今後、参考にしたい分類である。

2、遊就館

遊就館は、靖國神社内にあり、戦没者の遺品を中心として千人針を多数所蔵しているが、その中には明治期のものも含まれている。日露戦争時期のもの、恐らく当時千人結と呼ばれていたものであろう。日本国内で、日露戦争の千人結を所蔵しているのは、遊就館だけではないか。わずか2点であるが、日露戦争の記録と併せて検討すれば、日露戦争時期の千人結の実態が理解できる。

一つは、寸法55cm×33cm、もう一つは、約256cm×33cmと長尺で、どちらも木綿生地で織り目が粗い。太めの黒色の木綿糸をひとすくい縫って、2本ずつの糸を垂らし、その2本ずつの糸を何度か結んでいる。もしかしたら、あらかじめすべての糸を事前に縫い、均一な長さに切っておき、結ぶだけの仕様になっていたのかも知れない。それが千人結の由来なのかも知れない。

3、その他

この他、多くの博物館・資料館等で、多くの千人針を所蔵しているので、その一部を紹介しておく。国立歴史民俗博物館では収蔵資料のデータベースが公開されているが、千人針は音響資料も含めて21点が紹介されている。全国に戦争・平和関係の博物館・資料館に多くの千人針が収蔵されている。例えば姫路市平和資料館では、平成21年1月段階で、17点を所蔵している。全国の遺族会の中には、資料館に多くの千人針をもつところもある。また、各都道府県の護国神社にも遺品館のような施設に様々な遺品を収蔵している。

以上のような博物館・資料館等の情報を集約することで、ある程度の千人針データベースが作成可能ではないか。

VIII おわりに

「戦争の民具」の一つとして取り上げてきた千人針であるが、日露戦争以前の千人結成立の段階においても様々な習俗が複合的に成立したと考えられ、さらに日中戦争以降の全国的な普及の段階においても、様々な民間信仰や俗信が付与されていることが実物資料を細かく見ることで分かってきた。こうした事例を他の民俗事象との関わりを個別に分析しつつ、「戦争の民具」という枠組みの中で捉えなおすことで、千人針の新たな分析が可能となる。

末尾ながら姫路市平和資料館、遊就館、読谷村立歴史民俗資料館の方々には、調査に快く対応していただき感謝いたします。

<注>

- (1) 藤井忠俊『国防婦人会』岩波新書、昭和60年、p144-153。
- (2) IMPERIAL JAPANESE GOOD LUCK FLAGS AND ONE-THOUSAND STITCH BELTS, MICHAEL A. BORTNER, Schiffer Publishing Ltd; illustrated edition 版 (2008/4/1)
- (3) 江馬務「千人針のおこり」(大阪朝日新聞所載)『風俗研究』昭和7年4月1日、風俗研究所発行。
あくまでもこの報告は、有職故実の視点から風俗史研究者としての見解であり、今後、江馬務の説についても検証を加えていく予定である。
- (4) 「千人針古意」『皇国時報』昭和12年9月
- (5) 江馬務「千人針と防弾の安全衣について」『風俗研究』208号、昭和12年9月、p21

千人針データベースの作成に向けて

- (6) 山中恒『暮らしの中の太平洋戦争』岩波書店、平成元年、p53-70
- (7) 「宮崎の千人針 (一)」『みやざき民俗』63、平成23年、宮崎県民俗学会
- (8) サムハラについては、様々な文献があるが、主要なものを挙げておく。

村松裕一「符号「サムハラ」考証」『三河地域史研究』第12号、平成7年(1995)

大嶋一人「徴兵よけと弾丸よけの祈願」『昔風と当世風』第69号、平成8年(1996)、古々路の会、

加藤良治「弾よけ護符くさむはら」『西郊民俗』156号、平成8年(1996)、

大島建彦「サムハラ(漢字表記)神社の現状」『西郊民俗』157号、平成8年(1996)、後に『厄神と福神』に掲載

岩田重則『戦死者靈魂のゆくえー戦争と民俗ー』、吉川弘文館、平成15年(2003)、p154-168

- (9) この点については、ジェンダーの視点から千人針を分析した次の論が参考になろう。

山崎明子「表象としての『千人針』－『千人針』の表象分析のジェンダー理論によるアプローチ」

『家父長制世界システムにおける戦時の女性の差別の構造的研究』(研究課題番号17310153 平成17-18年度 科学研究費基盤研究(C) 研究成果報告書、平成19年3月)

表6 千人針関連年表

元号	西暦	九曜	干支	歳	歳	千人針関連項目	元号	西暦	九曜	干支	歳	歳	千人針関連項目
明治11年	1878	五黄	寅	1			大正元年	1912		子	35		
明治12年	1879		卯	2			大正2年	1913		丑	36		小説『銃後』
明治13年	1880		辰	3			大正3年	1914	五黄	寅	37	1	
明治14年	1881		巳	4			大正4年	1915		卯	38	2	講談『愛国心千人針』
明治15年	1882		午	5			大正5年	1916		辰	39	3	
明治16年	1883		未	6			大正6年	1917		巳	40	4	
明治17年	1884		申	7			大正7年	1918		午	41	5	
明治18年	1885		酉	8			大正8年	1919		未	42	6	
明治19年	1886		戌	9			大正9年	1920		申	43	7	小説『死線を越えて』
明治20年	1887		亥	10			大正10年	1921		酉	44	8	
明治21年	1888		子	11			大正11年	1922		戌	45	9	
明治22年	1889		丑	12			大正12年	1923		亥	46	10	
明治23年	1890		寅	13			大正13年	1924		子	47	11	
明治24年	1891		卯	14			大正14年	1925		丑	48	12	
明治25年	1892		辰	15			昭和元年	1926		寅	49	13	
明治26年	1893		巳	16			昭和2年	1927		卯	50	14	
明治27年	1894		午	17		日清戦争(~1895)	昭和3年	1928		辰	51	15	
明治28年	1895		未	18			昭和4年	1929		巳	52	16	
明治29年	1896		申	19			昭和5年	1930		午	53	17	大日本連合婦人会発足
明治30年	1897		酉	20			昭和6年	1931		未	54	18	満州事変(~1932)
明治31年	1898		戌	21			昭和7年	1932		申	55	19	大日本国防婦人会発足
明治32年	1899		亥	22			昭和8年	1933		酉	56	20	
明治33年	1900		子	23			昭和9年	1934		戌	57	21	
明治34年	1901		丑	24		愛国婦人会発足	昭和10年	1935		亥	58	22	
明治35年	1902		寅	25			昭和11年	1936		子	59	23	
明治36年	1903		卯	26			昭和12年	1937		丑	60	24	日中戦争
明治37年	1904		辰	27		日露戦争(~1905)	昭和13年	1938		寅	61	25	
明治38年	1905		巳	28			昭和14年	1939		卯	62	26	
明治39年	1906		午	29			昭和15年	1940		辰	63	27	
明治40年	1907		未	30			昭和16年	1941		巳	64	28	太平洋戦争
明治41年	1908		申	31			昭和17年	1942		午	65	29	大日本婦人会に統合
明治42年	1909		酉	32			昭和18年	1943		未	66	30	
明治43年	1910		戌	33			昭和19年	1944		申	67	31	
明治44年	1911		亥	34			昭和20年	1945		酉	68	32	終戦

※年齢は、明治11年と大正3年生まれの「五黄の寅年」の女性の数え年で、網掛け部分は女性の厄年を示している。

著者プロフィール

渡邊一弘(わたなべ・かずひろ) 昭和41年宮崎県生まれ

日本民俗学専攻。鹿児島大学大学院人文科学研究科修了。

宮崎県史編さん室、宮崎県総合博物館の嘱託職員や『日之影町史』専門調査員などを経て、平成13年から昭和館芸芸部勤務。平成20年から総合研究大学院大学日本歴史研究専攻博士後期課程